

## 近世中期における儒書唐音音読論

——平賀中南を中心として——

湯 沢 質 幸

### 0 目 的

近世中期の儒者平賀中南は、特定の師についたことがなかった。しかし、こと唐音については、その儒学入門書『学問捷徑』(『日新堂学範』)において、古文辞学派の祖荻生徂徠やその高弟太宰春台が提唱した唐音音読論を引き継ぎ、そして、それをさらに発展させた。彼の唐音音読論の最大の特色は、漢詩文作成における唐音音読の必要性を強調した点にある。それは当時既に提出されていた漢詩文作成における唐音不要論に対する反論という側面を持っているが、ここで不思議に思われるのは、唐音音読論の出発点である儒書読書に関して不要論への反論はおろかその紹介もないことである。この点については、『学問捷徑』は漢詩文作成法についてかなり詳しく論じていること(注1)から、それは作成法重視の一環として、漢詩文作成における唐音のことを重点的に述べた結果にすぎないと解すべきなのかもしれない。しかし、この書は入門書である。当然のことながら、儒学の第一歩である読書の仕方についても詳しく述べている。(注2)また、わずかながらも儒書唐音

音読を主張している所もある。したがって、当時もし儒書唐音不要論が出されていたのなら、作成におけるのと同様に、それに対する反論を行ってもよかつたのではないかと考えられる。ちなみに、周知のように近世儒学界にあって唐音音読は、ほとんど古文辞学派においてのみ行われただけであつた。この事実から知られるように、また後ほど紹介するように、十八世紀中後期、儒書唐音音読不要論がなかつたわけではない。ここに、なぜ『学問捷徑』に儒書唐音音読不要論に触れた所が見いだされないのであるかという疑問が生じてくる。本稿は、以下この疑問を解くべく、まずは近世中期の儒者における儒書唐音音読論と不要論とを整理し、その結果を音読の一般的なあり方などを踏まえながら吟味して、不要論への反論無の理由を追っていく。そして、加えては近世中期における儒書唐音音読論と訓読とのあり方についても若干考えてみる。

なお、各人の音読論については、初めに中南を、次いで徂徠と文雄、その後その他の儒者を音読論者Ⅱ雨森芳州・秋山玉山と、不要論者Ⅱ江村北海・村士玉水(注3)とに分けて見ていくことにする。

#### \*引用文

- ① 漢文は原則として訓読したものを掲げる。合符や声点などは省略する。特にことわらないものは湯沢。
- ② 句読点や濁点等は原文に従いつつ、湯沢が適宜変えまた施した。なお( )内は湯沢。

### 1 儒書唐音音読論 — 平賀中南 (一七二二〜九三) —

一七六二(安永八)年刊『学問捷徑』三巻の下巻冒頭において、中南は儒書唐音音読について次のように述べている。

a 漢ノ文ヲ学ブニハ先ヅ唐音ヲ学ブ要トス。唐音ニテ書籍ヲ読ミ漢語胸臆(ケラフ)(左注ムネノウチ)ニ浹治(ケツカフ)(同シミワタル)スレバ、文章ヲ書ニ臨ンデ自然ニ発出シテ唐人ト異ナル事ナシ。和語ニテ書ケバ善ク心ヲ用ル者ハ顛倒錯置等ノ事ハアラザレドモ、助字ニ至テ其安排覚リガタシ。下一才

a は、つまるところ彼が唐音音読に関してこの書でもっとも強く訴えかけたかった、漢詩文作成におけるその必要性を述べるものであるが、「唐音ニテ書籍ヲ読ミシ唐人ト異ナル事ナシ」から、彼が、唐音音読は中国人と同じように漢詩文を心に染み渡るがように読み味わう、つまり真に理解するためには必須のものであるとしていたことがうかがわれる。

a には、唐音音読をすれば「意思」がつかめるとする次の一文が続く。

b 其外字句ノウチニ言フニ言ハレ又意思アリ。コレハ唐音ニ熟セシ人ナラネバ知ル事能ハズ。下一オ「意思」とは今言うニユアンスの意と解される。

b の後においても漢詩文作成を念頭に置いて、唐音の学習や中国語会話のことなどに言及しつつ、「唐音に熟達するに」は）許多ノ年月ノ工夫ヲ費ストイヘドモ、此業（唐音に熟達した上で漢詩文の作成を行うことは）至極最上ノ良法ナリ（下一ウ）と述べる。そして、さらに次のように言う。

c 又字音（唐音）ノ正シキ事ハ得ズトモ四書五経等ヲ（唐音で）ナラヒ受レバ、大低文字モ読マレ知ラメ。字ハ反切ニテ読レテ僅ノ功ニテモ其ノ形似ヲ得テモ、其ノ業ハ成就スルナリ。シカアレバ何分唐音ガヨシ。此ノ按排ハ唐音ヲ知ルモノニアラザレバ知ル事アタハズ。下一ウ

唐音音読は漢字の習得にも大いに役立つとしている。

これまでの考察をまとめると、次のようになる。

中南は、儒書唐音音読は中国人と同様に、ニュアンスをも含め儒書をよく理解し心に感じとる上で必須のものである、また漢字学習にも役立つと見ていた。

## 2 儒書唐音音読論 — 古文辞学派 —

2-1 荻生徂徠（一六六六—一七二八）

近世儒者において儒書唐音音読論を最初に主張した徂徠は、<sup>(注5)</sup>いろいろな書の中で儒学学習における唐音音読の必要性を述べている。ここでは、彼がその読書法を端的に示している儒学入門書一七一四（正徳四）年刊『訳文筌蹄』「題言十則」を中心として彼の論を見ていくことにする。

2-1-1 「題言十則」第二項

a 学者の先務は、唯だ其の華人の言語に就きて、其の本来の面目<sup>めんぼく</sup>を識らんことを要す。（戸川芳郎訓読、以下同）  
五四八頁

この、読書の目的を述べる文には華音<sup>ワオン</sup>唐音という語は現れていない。しかし、周知のように、また本稿でも後ほど改めて紹介するように徂徠はこの書以前から唐音音読論者であったことや、「華人の言語」とは実際にはそれでつづられた儒書を指していること、一般に外国語の文献を読む場合最初に音読（声を上げて読むこと）をすることが多いことなどを踏まえつつ、儒書を声を上げて読む場面を想定してみると、ここにおける「華人の言語に就」くとは、「華人」がそうするように唐音音読することを意味する<sup>としか</sup>解釈のしようがない。一方「其の本来の面目<sup>めんぼく</sup>を識」るとは、儒書の意味内容を真に理解し把握することと解される。

以上、唐音に即してみると、aは、儒者にとって何よりも大切なことは、儒書を唐音で音読してその内容を正確にとらえることであるということ<sup>と</sup>を述べるものと考えられる。

さてaを含む一段落の後には、「読書の法」について述べる一連の文が続く。

b 其の、順逆に廻環して、然うして後に読むべきを観るときは、即ち其の上下位置、体段の同じからざることを知るなり。五四八頁

これを皮切りに、訓読の場合「転声（左注ステガナ）」を加えること、「助声（左注テニヲハ）」を用ゐること彼（原漢文）より多きこと、また「也・矣・焉の類」その他に関わつて、儒書の読み方における日中間の齟齬を縷々指摘する。そして、いずれにしても漢文と訓読文との間の最大の違いは、やはり「上下位置、体段脈勢」の相違にあるとする。このような相違の列挙は、もとより訓読の害のあげつらいそのものである。しかしながら、彼は結局日本は訓読によらざるをえないとして、この項を終える。

以上、第二項は儒書読書における唐音音読について直接述べたものではないが、徂徠が儒書唐音音読は漢文本来の「上下位置」「体段脈勢」等にのつとつて「其の本来の面目を識」る上で欠かせないものであると見ていたことを物語っている。

## 2-1-1-2 「題言十則」第五項

「学問之法」として従来行われてきた「講を悪む」こと、そしてその理由となる「講」における十の害を述べた後、その「十害を母と為し、百弊孳生す」として、周知の次の文を掲げる。

c 故に予れ嘗て蒙生の為に学問の法を定む。先づ崎陽之学を為し、教ふるに俗語を以てし、誦するに華音を以てし、訳するに此の方の俚語を以てして、絶して和訓廻環の読みを作さしめず。∴崎陽之学既に成りて、乃ち始めて中華人たるを得。而うして後に稍稍に経・子・史・集四部の書を読まば、勢ひ破竹の如けん。是れ最上乘なり。五五五頁

「華音」即唐音に焦点を当てると、cは彼が、日本人が儒学を学ぶには、まずは唐音を完全に身につけ中国人同様にすることが必要にして不可欠であると、すなわち、読書には中国人が行っている唐音音読を取り入れるべきであると考えていたことを示すものであることがおのずと知られる。なお、このような彼の考え方は、2-1-1-1 aを具体化したものとして解釈することももちろん可能である。ただし、cには即座にdが続く。

d 然れども崎陽の学、世に未だ甚しくは流布せず。故に寒郷縁無き者のために、定めて第二等の法を為す。五五六頁

「第二等の法」についてはこの後説明が加えられているが、言うまでもなくこの「法」とは訓読を前提とした学習法以外の何ものでもない。

c dには、唐音音読の効用が文面に明示されているわけでない。しかしながら、aを踏まえるとその底流には、徂徠の次のような見方があったとしか考えられない。

漢文は、もともと中国の言語に基づいて中国人が作ったものである、したがって、日本人が漢文を真に理解するためには、何はともあれ儒書唐音音読を重ねて中国人と同じように読解できるようにならねばならない。すなわち、儒書唐音音読は漢文解読において必要不可欠なものである。

## 2-1-3 「題言十則」第六項

「読書」の仕方を述べる中で、次のように言う。

e 一たび読誦どくじゆに涉わたれば、便ち和訓と廻環顛倒とあり。若し或いは従頭直下じゆとうちか、浮屠ふとの経を念ずるが如きも、亦た此の方生せい来の語音ごいんに非ざれば、必ず思惟しゆいを煩はす。五五九頁

ここには唐音という語は現れていない。しかし、漢文を読む時に用いるべき「生来の語音」とは、彼におけるしかるべき中国音即唐音以外にはない。したがって、この一文は、正統な唐音で音読しなければ、仏教の「思惟」は成就しない、それは儒書においても同じであるということと述べるものと解せられる。

## 2-1-4 筌蹄以外の書

『筌蹄』以外の書にも儒書唐音音読に関わる言及は少なからず見いだされるが、その多くは『筌蹄』と内容的に同じか、その一部を述べるものである。(注6)

## 2-1-5 徂徠の唐音音読論

既に述べたところから明らかかなように、徂徠の儒書唐音読論最大の根拠は、漢文はもともとは中国人のものであるということにある。そして、それに基づいて徂徠は、だから彼らと同じように儒書は唐音で読まなければその真の理解に達することはできない、ただしその唐音は正しいものでなくてはならないという、極めて簡明な論理を展開している。

## 2-2 太宰春台（一六八〇～一七四七）

徂徠門の儒者太宰春台は、一七二八（享保十三）年刊『倭読要領』において繰り返し唐音音読のことについて述べている。

### 2-2-1 「倭読ノ総説」

a 凡中華ノ書ヲ読ムハ。中華ノ音ヲ以テ。上ヨリ順下ニ読テ。其義ヲ得ルヲ善トスレドモ、吾国ノ人ニシテ。華音ノ読ヲ習フコト容易ナラネバ。已コトヲ得ズシテ。倭語ノ読ヲナスナリ。然レバ文義ヲダニ失ハズハ。其読法ハ人人ノ心ニ任スベシ。何ゾ必シモ門戸ヲ立テ。一家ノ法ヲ定ンヤ。上二オ

春台が読書においてもっとも大切にしていたことは「義・文義」の正確な把握であること、そして、そのためには、その書は中国の書であるから中国の音つまりは「華音」＝唐音でもって音読するのが最良の方法であるとしていたことが知られる。ただし、彼は、一方では最良の唐音音読でなく訓読によって「文義」を正しくとらえられないわけではないとも述べている。これは、訓読も「文義」の正確な把握の一手段となりうること、すなわち訓読の正当化をはっきりと述べている点において看過できない。ちなみに、その訓読のしかるべき仕方を述べているのが、この書『倭読要領』にほかならない。

### 2-2-2 「顛倒ノ読文義ヲ害スル説」

b 今吾国ノ人。中華ノ書ヲ以テ。此方ノ語トナシテ。顛倒シテ読ム故ニ。文義ヲ害スルコト多シ。上十一オ  
b は a と同じく、唐音音読によらねば「文義」は正しくとらえられないことを述べている。注意したいのは、訓読は「文

義ヲ害スルコト多シ」としていること、すなわち、aと同様、「文義」を害さない場合もあるとしていることである。

c今ノ学者。幼ヨリ顛倒ノ読ヲ習テ。華語ヲ解セザル故ニ。只カクノ如ク（顛倒して）読テ。其義通ズトオモヒテ。倭読ノ甚義理ヲ害スルコトヲ知ラズ。凡言語ノ道。中華ト吾国ト大ニ異ナリ。中華ノ書ハ。中華ノ人ノ言語ナルヲ。

日本ノ人ノ言語ニテコレヲ読メバ。日本ノ人ノ言語ニ異ナルコト無シ。上十二ウ

「義」「義理」の理解における訓読の害を指摘するとともに、儒書はもともとは中国人のものだから唐音音読すべきことをここでも述べている。

なお、bやcと同様に、文意把握において訓読の害を指摘したり唐音音読すべきことを述べたりする言及は外にもある。<sup>(注7)</sup>

## 2-2-3 春台の儒書唐音音読論

以上春台は要するに、もともと儒書は中国人のものだから正しく文意を把握するためには唐音音読しなければならないとしている。

## 3 儒書唐音音読論 — 非古文辞学派 —

### 3-1 雨森芳州（一六六八〜一七五五）

朱子学者芳州は、中国語さらには朝鮮語にも堪能であった。彼は一七八六（天明六）年刊『橘窓茶話』で唐音音読について明言している。<sup>(注8)</sup>

a書ハ直読ヨリ善ハ莫シ。否レバ則チ字義ノ精粗詞路ノ逆順、何ニ由リテカ知ルコトヲ得ン。譬ヘバ、一個ノ助辞ノ如シ。我国人ハ則チ日記スルノミ。韓人ハ則チ之ヲ兼ルニ、口誦ヲ以テス。直読スルガ故ナリ。之ヲ較レバ、我国人ト

差へり。四〇四頁

「助辞」を例としながら、唐音音読をしないと「字義ノ精粗詞路ノ逆順」を知ることができないとする。

### 3-2 秋山玉山（一七〇二〜一六四）

玉山は唐音音読を取り入れなかった官学林門下でありながら、こと唐音音読については古文辞学派に共鳴した朱子学者であった。一七五五（宝暦五）年成の『時習館学規』の第六項において次のように述べている。

a書ハ背誦ヲ須フベシ。誦ハ華音ヲ須フベシ。否ラズンバ則チ四声明ラカナラズ。同訓相ヒ混ズ。字位或ヒハ易ル。語助或ハ脱ス。以テ文辞ノ用ニ供スルニ足ラズ。和読ノ陋ナリ。故ニ書ハ必ズ背誦スベシ。誦スルニハ必ズ華音ヲモツテス。而シテ後齊楚合シ、彼ト是一トナル。是狂嶽ノ間ヲ処スルノ術ナリ。漢語師ヲ立ツベシ。二〇四頁

儒書唐音音読をしないと「四声」以下に述べるような不都合が生じ、「文辞」の正しい読解ができない、すなわち、音読は「文辞」の正しい理解に不可欠であるとしている。

なお、同書内の「時習館学規科條大意」「漢語師」の項でも同様のことを述べ、その後、しかしながら「漢語師」が見つかからないので、「先姑ク和音ニテ、頭従リ直下背誦セシム。庶クハコレヲ文辞ヲ措クニ、脱誤顛倒ナカラシムトヲ（二二〇頁）」と言う。そして、さらに彼はその次の項「教授正業」の中で「背書ハ、華音ヲ用ユ。今シバラク和音ヲ以テ、頭従リ直下読ス。コレ其浹洽ヲ致スナリ。是ヲ正業トス（二二二頁）」と述べている。和音音読の提唱は彼以外には知られていないが、漢字音による直読にこれほどまでこだわった人物は外にいなかったのではないかと思われる。

## 4 儒書唐音音読不要論

### 4-1 江村北海（一七一三〜一七八八）

近世中期における儒書唐音音読論

朱子学者北海は、一七八三(天明三)年刊『授業編』において、「唐音」という一項を立てて、他に類を見ないほど詳しく儒学における唐音について論じている。

#### 4-1-1 儒書唐音音読論の紹介(1)

「余唐音ヲ学バズ。其事モトヨリ不案内ナリ。サレドモ、此ニ其ノ標目ヲアゲテ、論弁スルノ主意ハ」という書き出しのもとで、北海はまず次のように述べる。

a世ノ唐音ニ通ジタル人ハ、唐音ヲ知ラザレバ、タトヘ文芸ニ名高クテモ、靴ヲヘダテ<sup>カユキヲ搔クニ似テ</sup>、畢竟吾邦ギリノ文芸ニテ、一詩一文、モロコシ人ノ人ヘシメシ難シ。サレバ文芸ニ志ス人ハ、モツトモ唐音ヲ学ブベシト云フ。六一二頁

これは、一見、漢詩文作成における唐音音読について述べているだけのもののように見える。しかし、「靴ヲヘダテ<sup>カユキヲ搔クニ似テ</sup>」は徂徠や春台の儒書唐音音読論を踏まえたものと見られること<sup>(注9)</sup>や、aに続いて紹介されている、次のb(唐音不要論)の「眼アリテ書ヲ読ミ」などから、儒書唐音音読論にも関わるものでもあると解される。すなわち、唐音音読をしないと漢詩文の理解や鑑賞において隔靴搔痒の思いをすること、言い換えれば、唐音音読をすることによって初めて漢詩文を真に理解し鑑賞することができるようになるということ<sup>(注10)</sup>を述べているものと解される。

b又唐音ヲ知ラヌ人ハ、眼アリテ書ヲ読ミ、心アリテ剪裁ス。眼ト心ト相謀リテ、学業ハ成就スル事ニテ、音ノ異同ハアヅカル事ナシト云。六一二頁

このように不要論を紹介し、そして、賛否両論に関して「両方トモ一理ハアレドモ、イハゞ互ニ過激アリテ、至公ノ論トハ云ベカラズ。故ニ余其ニツヲ折衷シテ、此ニ論列スルモノナリ」と結ぶ。

#### 4-1-2 儒書唐音音読論の紹介(2)

a bの後で、より具体的に唐音音読の効用を述べている論の紹介を行っている。私にまとめると次のようになる。

①オノマトペ

c 近時唐音ヲ主張スル人ノ説ニハ、凡ソ文字ニハ、形容字トテ、物ノ音ヲカタドリタル字アリ。華人ハ其音ヲ聞キテ、其音ニヨク協ヒタル字ヲアテガヒタル物ニテ、其字ニハ何ノ義モナシ。ソレヲ和読シテ、其字義ニ拘ルナドハ、ワケモノナキ事ナリ。タトヘバ、佩玉鏘々ノ註ニ、鏘々ハ金玉ノ声ナリト、何ト佩玉ノ鳴ル音ガサウクトイフガ、唐音ニテハ鏘々ナリ。(同様例列挙) コレラ(オノマトペの漢語を) 唐音ニテカクノゴトクニヨメバ、此ノ邦ニテイフトス コシモ(右注「少」)カワラズ。甚ダ趣アリ。六一三頁

この後、「和読」ではオノマトペの漢語の音的印象は分からないという旨のことを具体例に沿いながら述べている。

②喜怒哀楽の情

d タダ形容ノ字音ノミニ限ラズ。他ノ文字皆カクノ如シ。華音ニテハ、歎バシキトコロハ喜バシク、哀シキトコロハカナシキ味ヒアリテ、其趣自然ト深長ナリ。ソレヲ侏離ノ音ニテ読デハ、何ノセンモナキ事ナリ。(以下具体例列挙) 六一四頁

③暗誦

e 又華人ハ、ヨムトコロノ書、多クソラニテ記憶ス。何故ナレバ、華音ニテ直読スレバナリ。此方ニテモ、和訓ナガラモ直読スレバ、愚鈍ナル僧尼モ、ヨク仏経ヲ記憶スルニテ知ルベシ。此方ノ学者、和訓ニテ、例ノ顛倒シテヨム故ニ、煩蕪迂遠ニシテ記シガタシ。タマク、四書ナドヲ暗誦スル人アリテモ、試ニ筆ヲ授ケテ写サシムルニ、字座倒置シテ、助字多クタガフ。然ルニ華音ニ通ズレバ、文章ヲ書クニ位置倒ぜズ。語脈顛ぜズ。サレバ、華音ヲマナブハ、此邦ノ学者ノ先務ナルベシ。六一五頁

①②は、漢詩文におけるオノマトペや感情表現は唐音音読によらなければ、その「趣」や文学的な効果などは分からないとする主張を、③は唐音音読は漢文暗唱上有用であるとする主張をそれぞれ紹介している。そして、最後にこれらの当然の帰結を紹介する。それは内容的にはaで紹介されている説と同じで、漢詩文解義上唐音音読は必須であるとするものである。

f 華音ヲ知ラザレバ、当今名高ノ大儒トイヘドモ、詩文ノ誤謬ヲマヌカルゝ事アタワズト、コレ世ニ唐音ヲ主張スル人ノ説、大段右体ノ事ニシテ、イカニモ理ハ左様ナルベシ。六一五頁

なお、儒書唐音音読には関わらないので省略したが、②と③の間には、唐音音読をしないと日本製の中国風姓名の当否が分からないとする主張が紹介されている。もとより、これもまた①②③の場合と同じく、fで紹介されている説の根拠の一つとなっている。

#### 4-1-3 北海説

fに続いて、一方の唐音不要説にもそれなりに「一理」があるが、「其弁ノ長キヲ以テ、略」すと述べ、「要スルニ双方一理ハアレドモ、タガヒニ過激ナキコトアタワズシテ、公論ト云ガタシ」と、4-1-1の末尾で紹介したのと同様の総括を行う。そして、最後に自説を述べる。

#### 4-1-3-1 肯定論

彼の説の結論は先に述べた通りであるが、彼が唐音音読を理由もなく退けているわけではないことは既に紹介した彼の言及や、自説開陳の冒頭の次の一文などに明らかである。

g 余ガ意ヲ云ハズ、凡ソ学業ハ、漢土<sup>モロコシ</sup>ノ人ニ倣フ事ナレバ、唐音ニ通ズルホドノ事ハナシ。然レドモ、幼稚ノコロハ、何ノワキマエナケレバ、自己ニ發起スベキニモアラズ。成長シテモ、是ヲ学ブ因縁モナクイトマモナク、余ガゴトク

不案内ナル者ハ、唐音ヲ知ラヌハ、残念ナルコトト思ヒ、是ヲ知ラヌユヘ、学業ニアヤマリノ多カラン事ヲ思フテ、文字ノ位置ヨリ、何彼ニツケテ、ナルタケ心ヲツケ、唐音ニ通ジタル人ノ席ニアリテ、其説話ヲキカバ、タトヘ一ツ二ツナリトモ、聞テ益ヲ得ルヤウニスベシ。余ガ知ラザルヲ以テ、其コトハ益ナシト云ベカラズ。六一五頁

一読の内に、彼は理屈抜きに、儒学儒書はもともと中国のものなのだから、その読書に唐音を使用するのは当然である、儒書を唐音音読することによって「学業ニアヤマリ」がなくなるとしていたことが理解される。

#### 4-1-3-2 不要論

以上のように音読論は必要であることをひとわたり認めたと上で、北海はさらに自説を開陳していく。

h 唐音ニ通ジタル人ハ、是ヲ以テ自己ノタシナミトシ、是ヲ知ラヌ人ノ中ニテ、益モナキニ、ミダリニ唐音ヲ用ヒヌガヨシ。アマタノ人ノ中ニ、一兩人唐音ニ通ジタル人アリテ、其人ト互ニ唐話ヲ以テ往復スルナドハ、傍人ヘ対シテ大ニ無礼ナリ。余ガ知ルトコロニモ、此ノクセアル人アリ。六一五頁

i 唐音ハイカニモオボエタキモノナレドモ、中々容易ニナラヒ得ベキニ非ズ。幼稚ノ時ヨリ、コレヲ学ブニアラザレバ、トテモ用ニ立ツ唐韻(まま)ニハナリガタシ。既ニ其時ヲ過ナバ、一向中年ニモ及ビ、学業成就ノ後、指ヲ染テ大段ヲ会得シ、学業ノタスケトスルハ格別ナリ。六一五頁

j ナマナカ弱冠前後、読書ニ精ヲ専ニスル比、唐音ニ従事スレバ、諺ニイフ一モ取ラズ、二モ取ラズト云ニ至ル。余ガ知レル人、此ニ座シテ常ニソノ事ヲ云テ後悔ス。此トコロトクト(右注「篤」)考フベシ。六一六頁

ここではその紹介は略したが、h、i、jについてはそれぞれその後で先人の挿話や教えなどを交えながらさらに説明を加えている。

心構えを述べたhはさておくと、幼児期から学ばないと唐音に通じることはできないとするiと、唐音学習は場合によつ

てはかえって「学業」の妨げになるとするjは、不要論の根本的な論拠そのものにほかならない。

まず、iの場合、例えば玉山が言っているように(312)、唐音の師を得がたいこの時代、幼児の時から唐音を学べる環境にいた儒者などほとんどいなかったに違いない。しかし、北海は幼児の時から学ばなければ儒学に役立つほどの唐音力を身につけることはできないとする。つまり、iは、文字通り例外的な儒者が唐音を「学業」に生かすことができるだけである、したがって現実の日本儒学において唐音はほとんど役に立たないということを言うものと解される。

次にjの場合、唐音を学ばない者の「読書」は当然訓読によることになるわけだから、この一文は少なくとも「弱冠前後」においては訓読が唐音音読に優先することを述べているものとしか考えられない。そして、その頃は「読書ニ精ヲ専ニスル」時であるとしていることからして、jはつまるところ、読書に際してもっとも大切なのは確実な訓読力を身につけることである、その点において唐音音読は必ずしも必要でないと主張している一文であると解される。

ところで、i・jを踏まえるとhは、儒学に役だたせることは容易でない唐音など、なまじ学ばない方がよいとする意を含むものと言えないでもない。すなわち、無礼な振舞を儒者にさせないという点において、これもまた不要論を述べているものと解釈できないでもない。

#### 4-1-4 北海の儒書唐音音読論

gに端的にみられるように、北海は根本的理念的には唐音絶対主義者であり、儒書唐音音読論を是としていたものの、現実的には不要論を唱えていた儒者だったと考えられる。

#### 4-2 村土玉水(二七二八一七六)

朱子学者玉水は、一七六二(宝暦十二)年序・刊年末詳の儒学入門書『幼学階』で、一項を設けて極めて明快に儒書唐音音読不要論を述べている。まずその冒頭において不要論というよりも否定論を展開している。

a 或人ノ説ニ、唐音ニテ読習ヘバ直ニ唐ノ読方ノ通りニテ、音響ニテモ大抵通ジ此方ノ訓ノ誤ル事分明ニシラルト云者アリ。唐音知ラヌ人ヨリ見レバナルホドサモアルベキト思ハルレド、大ニ僻言ナリ。其ノ証拠ニハ、唐ノ人ニハ文義ノトリソコナイアルマジキハヅナレドモ、唐人文義ヲ誤レバ此亦アテニナリ難シ。真ノ唐人ト成タラバ大益モアルベケレドモ、一通り覚エタルばかりニテハ、文義ノ助ケトモナリ難ク、スグ読ニ読下シテカラガ上下ニ反ル意ニテスマサダレバスメザルユヘ学ビシ益ナキ事也。故ニ唐音ヲ学ブ暇ニテ上下エ反ル趣ニテ考ル方、本意ヲ得ルニ似タリ。前六オ

否定の根拠として村士は、それを行う中国人でも「文義のトリソコナイ」がないわけではないこと、唐音を「一通り覚エタルばかり」では何にもならないことを指摘し、なまじ唐音を学ぶよりは訓読でもってしっかりと儒書の「文義」をとるよう心がけた方がよいとしている。

a の後、さらに次のように続ける。

b 音声ノ妙四方通ゼザル事ナキ故、語気音響ノ和語ニ的当スル事、近世ノ四書ノ末書等ヲ考テシルベシ。況ヤ唐音ノ巨擘ハ長崎ノ訳者<sup>ソウジ</sup>ニシクハナシ。然ニ訳者十ガ五六モ学ビエラレヌト云。其余ノ者八十ガ一二モ学ビ得ガタシ。ソレニテ書バカリ唐音ニ読タリトテ各別ニラチアクベキ事トモミヘズ。既ニ訳者ニ書ヲ解サセテミルニ古書ハ通ゼズ。唯通用ノ俗話等ヲ取捌クノミナレバ無益ナル事知ベシ。且唐音ヲ知り文義ヲ誤ラヌト云人ノ文字取捌ヲミルニ甚シキ誤リ見ユレバ、唐音ノ無益ナル事明ナリ。但和語ニテ本書ヲ誤ラザル様ニ学バズ、本意漸ク明ナルベシ。此方儒書ノ対訳<sup>ステガナ</sup>ヲ見ルニ本意ヲシラザル読方甚多シ。学者疎略ニスベカラズ。六オ

中国語と日本語は「語気音響」において通じている。それは「近世ノ四書ノ末書等」において日本人が日本語でしっかりと理解していることに明らかである。唐音に通じている日本人「訳者」ならさらに完全に儒書解読ができるはずである

が、彼はそれがよくできない。また唐音に通じていて儒書の内容把握に自信があると自負している儒者の「文字取捌ヲミルニ」至っては、実は「甚シキ誤リ」がある。したがって、結論としては儒書唐音音読は無用であるとする。なお、bは一貫して儒書解読のことを論じていることから、「文字取捌」とは儒書読書に際しての漢字漢文の解読という意を表しているものと考えられる。

以上、村士は儒書の内容把握を軸として唐音音読を真つ向から否定し、それは訓読で十分であるとしている。

## 5 中南における不要論への反論無の理由

### 5-1 想定される理由

これまで儒書唐音音読について各書の言及を一通り見てきた。ここで当初の疑問、なぜ中南には儒書唐音音読不要論への反論はおろか単なる言及さえもないのかに立ち返ってみると、これに関しては次の二つの場合が想定される。

不要論未知説Ⅱ中南は不要論の存在を知らなかった。

不要論無視説Ⅱ中南は不要論のことは知っていた。しかし、取り上げようとも、取り上げて反論しようとは思わなかった。

### 5-2 不要論未知説

この説は、次の三点を重ね合わせると成立しそうにない。すなわち、必要論提出直後から出されていたに違いない不要論を、儒学界の一員として、加えて取り分け唐音に関心の深かった中南が知らなかったなどということはありえないからである。

①前述のように、近世儒学各派において儒書唐音音読を主張したのは一つ古文辞学派だけであった。しかも、それは中期中に儒学界からほとんど姿を消してしまった。これは、当初から儒者の圧倒的多数が必ずしも唐音音読に賛成していな

かったこと、当然当初から少なからずの儒者がそれへの反論や欠点の指摘などを行っていたであろうことを示唆している。

②儒学における唐音音読論は、儒書唐音音読論から始まる。そしてその後漢詩文作成における唐音音読論へと進んでいく。その中で、中南は後者に関わる不要論への反論を大々的に行っている（湯沢二〇〇七）。これは、彼が儒書唐音音読の是非が論じられ始めた時より後にいたことを示している。

③その著書の出版時はともかくとして、北海や村士などは中南とほぼ同時代の儒者である。また中南より一世代前の、春台と並ぶ徂徠の高弟服部南郭は、儒書唐音音読に対して消極的であったと見られる。<sup>(注10)</sup>

### 5-3 不要論無視説

未知説が成り立たないとすると、問題は、では彼にあって不要論を取り上げなかった、ないし無視した理由は何か、という点に絞られてくる。必要論者中南が無用論を無視し、反論を行わなかった理由は、必要論自体の中に、あるいは逆に不要論の中に見いだされるはずである。そこで、まずは前節まで見てきた両論の主張とその根拠を整理しておくことになたい。

### 5-4-1 必要論の整理

#### 5-4-1-1 儒書儒学誕生の地

徂徠以下の必要論を見ると、即座にその根拠は、春台（2-2-1 a）の言葉によれば「凡中華ノ書ヲ読ムハ。中華ノ音ヲ以テ。上ヨリ順下ニ読テ。其義ヲ得ルヲ善トス」ということに、すなわち、儒書儒学はもともと中国のものだから、中国人がそうするように中国の音<sup>ヨシ</sup>唐音で読み、そしてその意を把握するのが当然であるとする所にあったことが知られる。言葉を換えれば、そもそも「学者の先務は唯だ其の華人の言語に就きて、其の本来の面目<sup>めんぼく</sup>を識<sup>し</sup>ること（徂徠2-1

11a) にあるのだから、そのための第一歩である声を上げて書物を読むという段階においては、「先ヅ唐音ヲ学ブヲ要トス(中南1a)」ることになるのである。

ちなみに、一般に外国語の書物を声を上げて読む時には、その外国語の音を用いて頭の方から末尾に向って行うのが普通である。このような、外国文献の通例の読み方を振り返ってみると、儒書唐音音読論は、あえて主張する必要のないことを主張しているかのように映る。しかしながら、訓読のみで学業を行うことが言わば血となり肉となっていた時代にあつて、唐音音読論を展開するには、何よりも先に、儒書はもともと中国生まれのものであるという原点の確認を行わなければならなかったのである。

ところで、儒書は中国生まれということは、だれしも否定できない。したがって、例えば玉山のように文面においてそれと明言していなくても、賛成論者であればだれしもこのような認識を出発点として、その音読論を展開していたに違いない。

#### 5-4-1-2 文義把握

声を上げて読むことで、読書は終わりというわけではない。最終目標はあくまでも、それを(も)通して儒学の「本来の面目を識」ること(徂徠2-1-1a)、中国人が書いた儒書の「其義ヲ得ル」こと(春台2-2-1a)にある。既に紹介した、徂徠が、書物を唐音音読すれば「順逆」のことなど日中間の齟齬を知ることができることなどは、それが正確な文義把握という最終目標達成の一助になるということを使うがための発言にほかならない。また、春台や芳州が唐音音読をすれば「助辞」や「四声」のことなどがよく分かり、「文義」「字義」を正しく理解できるとしていることなども、すべてその最終目標が文意把握、正しい解義にあったことを反映している。そのほか、北海の指摘した、オノマトペや喜怒哀楽の情の理解や味わい、あるいは暗唱などに唐音音読が寄与することなども同様である。

一方、唐音が漢字学習や中国風姓名の判断あるいは「モツタイ」があることなどにおいて役立つという主張は、<sup>(注11)</sup>各書の儒書唐音音読論において最初の方で取り上げられていないこと、唐音論における本格的な議論すなわち解義に関わるもの対象となっていないとは認めがたいこと、またそれ自体が断片的であることなどから、文義把握に比べると周辺の第二義的な根拠とされていたのでないかと思われる。

### 5-4-1-3 儒書唐音音読論の根拠

以上をまとめると、儒書唐音音読論は、その根拠を一つは儒学儒書は中国が発祥の地であるということに、もう一つは、それと関わって、儒学の最終目標は儒書の文意の正確な把握ということに置いていたと考えられる。

### 5-4-2 不要論の整理

不要論の根拠は何か。北海の、儒者としての心構えに関する感情的とも思われる発言などはともかくとすると、こと必要論者の根拠であり出発点でもある、儒書は中国のものとする<sup>(注12)</sup>ことに対しては、もちろん北海、玉水両者にも反論がない。ただし、したがって日本人も中国人と同様に唐音で読むべきであるということになると、北海は根本的にはそれを是認しているのに対して、玉水は日中両語間には音声的にあい通じる所があるから、それに従う必要はないとしているわけである。では文意把握においてはどうか。この点について、北海はそれと明言しているわけではないけれども、彼の発言、取り分け4-1-1-3-2-jから、読解に唐音が必要な場合はそれに通曉している者に聞くと<sup>(注12)</sup>いう含みにおいて、彼は訓読で十分可能であるとしていたと認められる。一方、村土も、日中語共通論のもとで、唐音音読をする中国人自体必ずしも儒書を正しく読解できているわけではないこと、同様に日本人通訳は儒書に通じていないことなどを挙げて、結局訓読で十分であるとしているわけである。

読書の最終目的は内容把握に尽きることを顧みつつ以上の考察を踏まえると、不要論は、文意の正確な把握は訓読で

十分可能であるという認識に最大の根拠を置いていた、なおそれに関わっては日中音声共通説を唱えるものもいたということになる。

### 5-5 中南における不要論（への反論） 無の理由

唐音音読は漢字学習にも役立つとするという付加的な発言はさておくと、中南は徂徠や春台達と同様、儒書は中国生まれなのだから日本人も中国人と同様に唐音で直読するのが当然であり、そして、そうしてこそニュアンスなども含めてその内容をよく把握できるとしていたことに疑問の余地はない。このことと、その多少精粗は不明であるが彼は不要論の存在を知っていたに違いないことを重ね合わせると、彼が不要論への反論はおろか言及もしなかった理由は、彼においては既に要不要の議論は完全に決着しており、したがって不要論は無視しても差し支えないものとなっていたのではないかと言わざるをえなくなってくる。そして、無視の理由は、これまで述べてきたことからおのずと想定されるように、儒書は中国文献であるという所にあつたものと考えられる。儒書が中国生まれということは絶対不動である。だからこそ北海も根底において音読を是認せざるをえなかつたし、玉水は日中音声共通説を出さなければならなかつた。また、そのような意見の存在を中南が知っていたのがどうか分らないけれども、北海の紹介した不要論「唐音ヲ知ラヌ人ハ、眼アリテ書ヲ読ミ、心アリテ剪裁ス。眼ト心ト相謀リテ、学業ハ成就スル事ニテ、音ノ異同ハアツカル事ナシト云フ（4-1-1b）」をもつてしても、この事実を否定しすることはできない。<sup>(注19)</sup> ちなみに、徂徠春台玉山また芳州等、他の儒書唐音音読論者にあつても不要論の紹介やそれへの反論がないことや、近世の有力な儒者の発言の中にも不要論が見いだせないことなども、彼らが等しく儒書は中国生まれということを絶対不動と見ていたからであるに違いない。また、読書の最終目的である内容把握のことも、当然不要論無視の理由となつていたはずである。すなわち、彼は、中国生まれの書を読んで理解するには唐音が不可欠であると信じていたに違いない。ちなみに、中国人や通訳が儒書を正しく読めるわけではないという指摘

が不要論者からなされているが（4-2 a b）、唐音音読が儒書の理解に害をもたらすといった説はだれからも出されていない。

ただし、既に見てきたように、述べ方はいろいろであるが、唐音音読の先達である徂徠や春台等でさえ早々に、唐音音読は最上の読書法であるけれども現実的には訓読を取るより仕方がない、しかるべく訓読すれば儒書の内容を正しく把握できる、控えめに言えば把握できないでもないとしている。さらにこれについては、次節の結論の先取りとなるが、中南における実際の読書も訓読を基調とするものであったということがある。これら先人と中南とを重ね合わせると、これまた徂徠や春台などに依りつつ彼は、内容把握は本来唐音音読においてなさねばならないと言いながらも、しかるべき方法によればそれは訓読によっても十分可能であるとしていたものと解される。すなわち、唐音の、内容把握上の役割ということも彼における不要論無視の理由の一つとなつてはいたが、儒書誕生の地は中国という無二絶対の理由に比べるとそれは副次的付随的な理由にすぎなかったと言ふべきなのかもしれない。

以上、中南は、徂徠や春台などにならつて、内容把握は訓読によつて行えないでもないとしながらも、儒書は中国生まれだから唐音音読を通してその内容の正確な把握を行うべきである、これは不動の原理である、したがって、もはや儒書唐音音読不要論への反論はおろか言及すら行う必要はないと見ていたのであり、その結果が『学問捷徑』に現れているのであると考えられる。

## 6 付 論 — 今後の唐音音読研究に向けて —

本稿の結論は既に前節で述べた。本節では、それを踏まえながら今後における儒書唐音音読論の研究に向けて、中南における唐音音読論と実際の読書法との関係をかいま見ておきたい。

## 6-1-1 実際の読書法

中南が儒書唐音読を絶対としていたとしても、それがそのまま実際の読書において行われていたという保証はない。なぜなら、彼の発言の中に読書法において唐音音読と相対立する訓読を退ける言及を、それと見いだすことができるわけではないからである。また、もとより彼が確固たる伝統に支えられた訓読を、早々に廃止したなどということも想定しがたいからである。

### 6-1-1 唐音音読と訓読との関係(1)

中南は、いったい実際の読書をどのように行っていたのであろうか、また行うべきとしていたのであろうか。この実践上の問いに関して、彼に直接述べる所はない。しかしながら、『捷徑』は入門書である。したがって、関連する言及は随所に見いだされる。その中で読書法について述べた『捷徑』上巻冒頭、つまり『捷徑』冒頭部分は看過できない。その第一項は次のような言葉から始まる。

a 我ガ日本人ノ唐山ノ学問スルハ、唐人ヨリモ一倍ノ工夫ヲ費ス事ニテ甚難キ事ナリ。何ントナレバ唐山ノ書ノ文理モ分レ字義モ詳ニナリ。無点物サラくト読ルムヤウニナル、是学問ノ半功ナリ。カヤウニナリテ唐人ノ無学ノ人ト平等ナリ。唐ノ人無学トイヘドモ後世ノ書ハ看ルニ随テ通ズルナリ。ナヲ日本人和学セヌ人モ平家物語太平記ノ類ヲ読ガゴトシ。古書ハ註釈アレバ通ズルナリ。ナヲ日本人ノ源氏物語伊勢物語ナド抄サヘアレバ通ズルガゴトシ。故ニ先ヅ無学唐人ニナラネバ所詮学問ハ成就セヌト心得ベシ。勿論和訓点付ニテ読テ通ズルヤウニ覚ルモノアラン。ソレハ大ナル僻事ナリ。和訓ニテ通ズルハ譬ヘバ影画ノ人形ヲ見ルガゴトク、象ハアレドモ耳目鼻口モ分レネバ色ツヤハナヲサラナリ。上一オウ

「学問ノ半功」すなわち「無学唐人」に達するためには、「無点物サラくト読ルムヤウニナ」らねばならないとする。

「無点物」<sup>ムテンモノ</sup>とは「和訓点付」<sup>ワクンテンツキ</sup>でないものに違いない。それを「サラ／＼ト」読む時に唐音を用いるのか、訓読によるのかは、文面からはよく分らない。ただし、少なくとも「無点物」<sup>ムテンモノ</sup>に至る以前の読書は「和訓点付」<sup>ワクンテンツキ</sup>。訓読だったに違いない。なぜなら、学習者が「点付」<sup>テンツキ</sup>を読んではいなければ、彼において「無点物」<sup>ムテンモノ</sup>「和訓点付」<sup>ワクンテンツキ</sup>の可否やそれによる読書の是非などは話題になるはずがないからである。

なお、「和訓点付ニテ読デ通ズルヤウニ覚ルモノ」<sup>ワクンテンツキ</sup>がいるが、訓読による読書は「影画」<sup>カゲエ</sup>を見ているようなものだとしている。残念ながら、ここからも中南がいずれの方法を選択していたのか、うかがい知ることはできそうにない。

さて、aに次いで、「或恐是同郷」<sup>ハルレオラン</sup>という句を掲げてその文意の穿鑿を行い、「凡ソ盛唐ノ絶句助辞ノ働キニテ深意ヲ見ス」<sup>シメ</sup>。故ニ字義ニ疎ケレバ盛唐ノ妙処ハシル事アタハズ。(二才)と述べる。その後も同用例を二つあげて、それに説明を加えながら、読書においてはまず「影絵」の読書から抜け出て「無学唐人」にならねばならない、そのためには「(原漢文の)字義」や「文理」を明らかにすることが必要であるとする。中南のこれらの言及は、次の三点から彼が読書に関しては訓読を前提としていたことを示しているものと解される。

① 同用例も含めてここで挙げられている実例は、すべて訓点付きであること。

② 日本儒者の場合、儒書の意味内容の把握は結局日本語によって行われることになるが、その際伝統ある訓読が一切行われななどとは考えられないこと。

③ a以降、絶えて唐音という語が現れていないこと。唐音音読を前提としているのなら、例えば「無学唐人」との関わりにおいて唐音や唐音音読のことが少しは触れられていてもよいのではないかと思われること。

これまでの分析はいずれも、本文第一項は唐音音読でなく訓読を前提とした言及であると見た方が無理がないことを示している。この点について『捷徑』の他の部分に眼を転じてみると、この書にはこのような見方を支持する言及こそあれ、

否定するものは見いだせないことを知る。一例をあげてみる。

### 6-1-2 唐音音読と訓読との関係(2)

上巻第二項冒頭は、第一項末尾(上三才)の、(以下においては「無学唐人」となりそしてそれを乗り越えるための「学ビヤウノ次第ヲ示」す)という予告を受けて、「素読」について述べているが、中南はここで、七、八才まで、最大限十才までの弟子に行う素読において師は「句読ヲヨク正シ音訓トモニ誤リナキヤフニ教ユベシ(上三ウ)」としている。また、その次の第三項では、十才以上になってから学問を始める者における学習法の第一は、「唐詩選ヲ音訓点ヲ誤ラズ數百返熟読ス(上四オ)」ることであると述べている。

なお、この二つの言及には「音」という語が出てくるが、この「音」は「句読」「訓」「点」などと一緒に用いられていることから、唐音(音読)と解するのは到底無理である。すなわち、両項に一切唐音という語が現れていないこととあいまって、それは訓読の際音読みする漢字のその音を意味するものと解される。

中南が学問の基礎の基礎とする素読において訓読が行われていたということは、とりもなおさず、彼の読書論は実は訓読を前提として展開されていたということを物語っている。

### 6-1-3 読書の実際

中南における読書の基本は訓読だったということは、唐音音読論に立っていた徂徠や春台そして玉山などが、唐音教授の条件が整っていないということから、結局門人への儒書唐音音読必修を断念していることからもうかがわれるところである。なお、中南その他の儒者に、中南が弟子に儒書唐音音読を必修として課したという言及はない。

### 6-2 今後の課題

中南は実際の読書は訓読を前提として行っていた。ここにおのずと、いったい彼は唐音音読論と訓読とをどのように関

係づけていたのか、すなわち、彼が高く評価した唐音音読と実際の読書で行っている訓読との彼における整合性はどこにあるのか、という疑問が生じてくる。

素読を初めとして訓読が根本となっていたということは、この疑問はつまるところ、実際の読書が訓読を中心として進んでいる中で唐音はいったいつどのように学習され、またそれによる儒書音読はいつどこでどのように行われたのかということ、そしてまた、一人中南だけでなく、徂徠以下の唐音音読論者すべてに向けられる性格のものでもあるということを示している。残念ながら本稿の筆者にはまだ準備がととのっていないので、このことについてはいずれ稿を改めて考えてみたい。

(注1) 例えば、中巻においては「作詩法」という一節を立て、全二四丁中の二十丁近くを漢詩文作成論に当てている(湯沢二〇〇七)。

(注2) 例えば上巻の場合、全一六丁が大なり小なり、陰に陽に読書法に関わっている。特に冒頭から第四項四丁ウまではそのみについて述べている。

(注3) 北海は後述のように、少なくともその文面においては中間派と言うべきである。しかし、実質的には不要論に傾いていることは明らかなので、本稿では不要論者とした。

(注4) 中南における漢詩文作成に関わる唐音については湯沢二〇〇七。

(注5) 明や清からの亡命儒者などとはもとより、例えば中野搗謙(一六六七〜一七二〇)や後に本稿でも取り上げる雨森芳州などのように、近世儒者の中には徂徠よりも先に儒書唐音音読を行っていた(と見られる)者が少なからずいる。しかし、儒学界において広くまた積極的に唐音音読を主張した最初の人物はだれかということになると、それはやはり徂徠以外にはいない。

(注6) 『文野』(国立国会図書館蔵本)上二オ・下一オなど、『文戒』三二〇頁、『護園二筆』五七四頁、『詩文国字牘』五八二頁など。なお、

古文辞学派の服部南郭（一六八三〜一七五九）に師事した湯浅常山（一七〇八〜八一）一七四九（寛延二年、一七五三（宝曆三）年著『文会雜記』には、次のような言及があるが、これも徂徠が儒書唐音音読を是としていたことを物語るものと言えよう。子式、華音ノコトヲ徂翁ニ問シニ、イヤ〜マアヒントント詩ヲウタヘバモツタイガアリテ、子式ハ華音ヲシリタルホドニ、詩上手ナルラント人ガ思ント笑ハレタリ。子允又華音ノコトヲ問レシニ、イヤ〜学問ニ華音ヲスルハ、鬼ニ金ボウヲモタセタル也ト云レタリ、ト君修ノ話シナリ。二五五頁

〔注7〕例えば次のような一文がある。①今ノ世ノ儒者。多ク書を読み。能ク経術ヲ談ジテ。頗スコフル發明スル所アレドモ。古人ノ語ニ於テ。靴クツヲ隔ヘテ。痒カユヲ搔カクガ如クナルハ。倭語ノ習ナラヒ。顛倒ノ弊ツイエ。俱ニ痼疾トナリテ。其靈智ヲ昧クラマス故ナリ。上十四オ ②若コレ（「倭語顛倒ノ読」という「甘キ毒」）ヲ除ノソカントオモハゞ。華語ヲ習フニシクハナシ。華語トハ中華ノ俗語ナリ。今ノ唐話タウワナリ。サレバ文学ニ志アラン者ハ。必唐話ヲ学ブベキナリ。上十四ウ

〔注8〕aの外にも例えば『橋窓茶話』四〇四頁や一七五四（宝曆四）年跋一七八九（安政一）年刊『たはれぐさ』二二三〜四頁などに、唐音音読に触れた言及がある。ただし、儒書唐音音読をそれと主張するものというところ、現在までのところaしか見いだせない。

〔注9〕「題言十則」五四七頁。注7①。

〔注10〕石崎一一九頁。湯沢二〇〇七。

〔注11〕注7参照。

〔注12〕訓読で解読可能とする主張は、例えば玉水のように、当時の日本人儒者の中には文意把握において日本人は中国人をしのいでいる（所もある）と考えていた者がいたことを示している。この点についてはいずれ別稿で述べてみたい。なお、儒者ならぬ日本人通訳には、玉水に対して返すべき言葉はなかったであろう。

〔注13〕北海は不要論の紹介は長くなるので行わないとしているが（4-1-3）、彼の唐音論の根底には儒書唐音音読論の肯定があることを踏まえると、彼は不要論は根本的には成り立ちえないと考えていたので、あえてその詳しい紹介を避けたのかもしれない。

参考文献

石崎又造一九六七『近世日本に於ける支那俗語文学史』清水弘文堂書房（原刊一九四〇 弘文堂書房）  
湯沢質幸二〇〇七「近世中期儒学における唐音―平賀中南を中心として―」『文芸言語研究言語篇五一』

資料

- 『学問捷徑』…『江戸時代支那学入門書解題集成』第三集 一九七五 汲古書院  
『橘窓茶話』…『日本随筆大成』第二期第七卷 一九七四年 吉川弘文館  
『護園二筆』…『荻生徂徠全集』第十七卷 一九七六年 みすず書房  
『時習館学規』…『日本教育文庫』「学校編」一九七七年 日本図書センター  
『詩文国字牘』…『荻生徂徠全集』第一卷 一九七三年 みすず書房  
『授業編』…『日本教育文庫』「学校編」一九七七年 日本図書センター  
『たはれぐさ』…『日本随筆大成』第二期第十三卷 一九七四年 吉川弘文館  
『文戒』…『荻生徂徠全集』第十七卷 一九七六年 みすず書房  
『文会雜記』…『日本随筆大成』第一期第一四卷 一九七五 吉川弘文館  
『文野』…国立国会図書館  
『訳文筌蹄』「初編」…『荻生徂徠全集』第三卷 一九七四年 みすず書房  
『幼学階』…『江戸時代支那学入門書解題集成』第三集 一九七七年 汲古書院  
『倭読要領』一九七九年 勉誠社

（本学教授）